



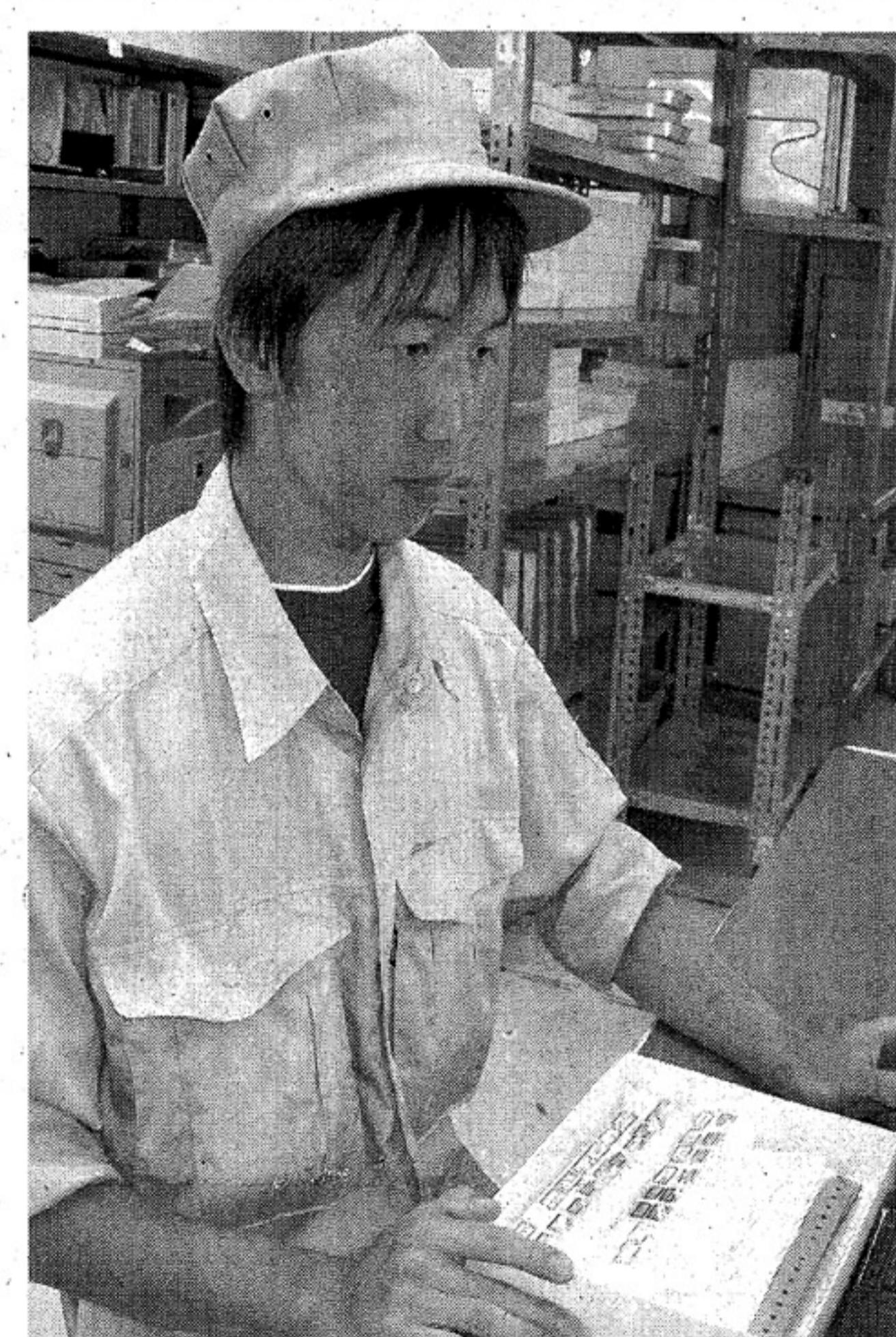
砲弾型LED部品を製造する作業場。トリコンの心臓部だ=島根県邑南町

トリコン 平成12年4月、父親の春人さん(84)の経営で立ち。砲弾型LEDランプの専門メーカーとして街路灯や防犯灯、投光機などの応用製品製造も手がけ、レンタルライトアップ事業にも力を入れている。資本金1500万円。平成23年の売上高は約2億4500万円。社員はパート8人を含め41人。島根県邑南町中野3825の8(☎0855・95・2150)。

「応用商品は自分たちで作ることにこだわらない。培ったプロの目に合格した海外の安い、いい物を使ってコストを抑えて提供する」と強調。「職人集団」を社是に掲げるが、上田社長の考えは「旅館と同じようにサービス業でしか生き残れない」と話すように大きく転換している。

月曜には全社員が出席する朝礼で経営状況から生産計画、品質、課題などを話し合う。「今一番必要なのはチームワーク。製造業がサービスに賭けるにはみんなが心を一つにしないと」と力説する。

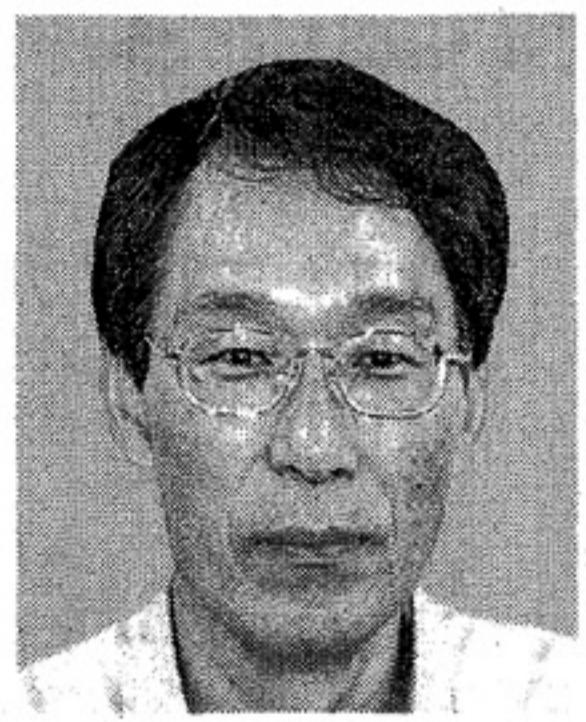
5年前、石見銀山遺跡(同県



大田市)の世界遺産登録を記念して「電子螺^{らう}」(7色)を開発した。サザエの貝殻に油を入れて火を灯し、暗く狭い鉱山の

間歩(坑道)を照らした螺灯をアレンジし、1個1500円で販売中。売れずに苦戦しているが、観光プロモーターの門脇修二さん(46)は「過酷な労働を担つた鉱夫たちの『命綱』だから物語性がある。木箱に入れたたり、気の利いた説明文をつけるなど工夫すればヒット商品になる」とアドバイスし、期待をかける。試行錯誤は続く。

顧客志向の応用商品で活路



上田康志社長

島根県中部の山々に囲まれた地で蛍光灯や白熱球、ネオン管など既存の光源に取って代わるのは確実とされる発光ダイオード(LED)を製造している。上田康志社長(54)は「国内の製造業はこのままでは生き残れない」と危機感を抱きつつ「少量多品種や高付加価値、お客さんに合わせてアレンジしたオーダーメードの応用商品で活路を開く」と力を込める。

(山崎泰弘)

厳しい現状認識を指摘する端などで海外の技術者でも十分設計できる」とため息をつく。前身の島根邑智電子は昭和58年の創業以来、大手電機メカナーの孫請け会社としてガラスに似たエポキシ樹脂レンズで覆われた砲弾型LEDランプの製造を主力に業績を伸ばしてきた。しかし、8年前に親会社がデバイス(電子部品)製造から撤退し、中国など海外工場にシフトさせたことで成長にブレーキがかかった。ピーク時の同60年代には約10億円あった売上高は約4分の1に減った。

そこで「自立」を目指し、LEDの特性を生かしたライトアップ照明や防犯灯、信号機など

の応用商品の開発に加え、ソフト面でのライトアップ事業に力を入れている。平成21年の師走にホームが地上30㍍にあるJR三江線・宇都井駅(邑南町)で開かれた「INAKAイルミおおなん」(実行委主催)では、6階建てに相生した高架駅を青色で鮮やかにライトアップ。総務省所管の財団法人・地域活性化センターの「ふるさとイベント賞」を受賞した。色鮮やかさ▽赤、青、黄など多彩な色▽7分の1程度で済む電力などLEDの長所を生かした各種照明器具をそろえたレンタルのライトアップ事業に手応えを膨らませ、期待をかける。

■ トリコン(島根県邑南町) ■

企
業
特見

特性検査担当 三木博史さん

これが目標という。「本を読んでいない

頼れる
戦力

と、言葉が出てこない。自分の知識がないと自信をもってお客様に薦められない。当面、専門知識を高めたい」という。

豊かな自然に囲まれたアパートで1人で暮らす。「雲の上にいるようで冬の朝霧に驚いたけど、おいしい野菜などもある自然豊かなこの町は気に入っています」と目を細める。

パソコンが得意だが、仕事が休みの日は最近、始めたというスノーボードで汗を流すスポーツマンだ。

専門知識を高める

「仕事を覚えなくっちゃ。広い意味でいうと、社会人としての人と人の接し方を学んでいます」。試作サンプルの特性検査を担当する4人のジェネラルスタッフの1人、三木博史さん(23)は謙虚さを漂わせながら話す。

島根県立出雲工業高校の電子機械科から島根職業能力開発短期大学に進学し昨春、入社した。

「光る素(チップ)を基盤にのせ、線をつなぐなどすると砲弾型LEDランプができる。出荷までの一連の作業がようやく分かってきたところ。寿命の長いLEDには魅力を感じます」

将来は営業を含めマルチに動ける